

第 16 回天気予報研究会議事次第

日時:2019年2月23日(土)13時30分~16時30分(受付開始13時)

場所:気象庁講堂

(挨拶)

下山紀夫(日本気象予報士会) 13:30~13:35

(講演)

1. 「流水観光に向けた海氷情報」

辻健太郎(気象庁海洋気象課海洋気象情報室) 13:35~14:10

2. 「気象を観光資源に」

武田康男(空の探検家) 14:10~14:35

3. 「日本の気候が作り出した世界遺産」

森さやか(NHK WORLD 気象アンカー) 14:35~15:00

休憩

15:00~15:10

4. 「秩父地方の雲海とその予報について」

富田浩充(秩父市役所) 15:10~15:35

5. 「自然現象(霧)を活用した地域活性化の取り組み」

今村聡(日本気象予報士会 川内川あらしプロジェクト) 15:35~16:00

6. 「屋気楼の見える街 魚津での屋気楼観光と気象」

佐藤真樹(魚津埋没林博物館) 16:00~16:15

質疑応答

16:15~16:30

主催:日本気象学会天気予報研究連絡会

第 16 回天気予報研究会講演要旨

講演

1. 「流氷観光に向けた海水情報」

辻健太郎（気象庁海洋気象課海洋気象情報室）

オホーツク海の海水は例年 1 月頃になると北海道の近くまでやって来て、4 月頃に去って行く。このような海水は、船舶の航行や沿岸漁業の障害となるほか、波浪を弱めたり大気と海水の間の熱や水蒸気の交換を妨げたりする効果があるなど、沿岸防災や気象現象の予想には重要な要素の 1 つである。このため、気象庁は、北海道周辺における海水分布の現在の状況や見通し等についての情報を発表している。また、海水の長期的な変化傾向は、気候変動の指標にもなり得ることから、定期的に情報を発表している。

このような海水は、北海道の重要な観光資源の 1 つである「流氷」として、その動向が毎年注目されている。このため、気象庁が発信する海水の現在の状況や見通し等の情報を、流氷観光を計画する際の目安、当日の最適な場所の把握、観光船の効率的な運用などにも、これまで以上に役立てていただきたいと考える。本講演では、流氷観光への利活用という視点を踏まえた上で、気象庁が公表する海水情報等についてわかりやすく解説する。

2. 「気象を観光資源に」

武田康男（空の探検家）

空を楽しむ国内ツアー（富士山五合目、伊豆大島、冬の北海道など）や、オーロラ、皆既日食、バイカル湖の氷などを見に行く海外ツアーの解説を行っていて、その企画内容やツアーの様子をリスクなども含めて説明する。また、各地のさまざまな気象現象を 4K 動画や写真に記録し、書籍、テレビ、新聞などで紹介していることも伝える。

例えば、長い期間撮影した富士山の空の映像には、興味深い雲や光の現象が見られ、それらは国内外に誇れるものだと感じている。日本国内だけでも、北海道から沖縄までさまざまな気候と四季の移ろいがあり、それによってさまざまな気象現象が見られ、それらは大きな観光資源になると思う。

また、雲や大気光学現象などの本がこんなにたくさん出版されている国は他にないだろう。このように、気象を観光資源として有効に生かせる場面がいろいろあり、気象に関わっている人はそれらに対して積極的なアプローチがあってよいと思う。

3. 「日本の気候が作り出した世界遺産」

森さやか（NHK WORLD 気象アンカー）

このところ、日本の世界遺産登録が連年続いている。富士山が文化遺産として登録された2013年からは毎年1件ずつ増え続け、2018年7月には「長崎と天草の潜伏キリシタン関連遺産」が新たに登録された。これを含め、現時点での日本の世界遺産の総数は22を数える。

一方、2018年は訪日外国人の総計が3千万人に達する見込みである。また中高年世代の旅行ブームも手伝って、世界遺産を含めた国内の優れた景観や史跡に足を運ぶ観光客の数が飛躍的に伸びている。世界遺産がその最強の誘因となっていることは明らかだ。

世界遺産は、太古から現代までの長い歴史の中で、人間の営みが築き上げた世界文化遺産と、地球自体が形成した世界自然遺産とに分類される。今回の発表では、日本の世界自然遺産である知床、白神山地、屋久島、小笠原諸島に焦点を当て、それらが形成された背景となった固有の気候を掘り下げてみたいと思う。

4. 「秩父地方の雲海とその予報について」

富田浩充（秩父市役所）

埼玉県西部の秩父盆地では、放射霧（いわゆる盆地霧）が年間を通じて度々発生し、盆地を囲む山からはこの霧を雲海として見ることができる。近年、この雲海が「都心から一番近い雲海」として注目されるようになり、多くの観光客が雲海を目当てに秩父地方を訪れるようになった。

雲海の発生を予測するためには様々な気象条件を考慮する必要があり、一般の観光客ではその予測が難しい。そこで、様々な気象要素から翌日の雲海発生率を算出する「秩父の雲海予報 bot（ボット）」を開発し、翌朝の雲海発生確率をSNSに毎日発表している。この取り組みについて紹介する。

また、地元自治体や企業が雲海という自然現象を観光資源としてどのように活かそうとしているのか、その事例等についても紹介する。

5. 「自然現象（霧）を活用した地域活性化の取り組み」

今村聡（日本気象予報士会 川内川あらしプロジェクト）

鹿児島県薩摩川内市を流れる川内川では、秋から初春にかけての主に寒候期、「川内川あらし」といって霧が河口付近で勢いよく海に流れ出し、海では蒸発霧が大量に発生する幻想的な光景が見られます。このような光景が見られ

るのは現時点で一級河川では日本では三か所という珍しい現象であることから、これを地域おこしにと、地域住民・行政・企業が連携した活動が始まりました。

これまでの活動を通して見えてきたのは、気象現象（自然現象）を地域おこしに活用することによる様々な課題や問題点です。これらは全国で同様な地域おこしを行われている所でも同じような問題を抱えていることが推測され、これから活動を始めようとする方々にも参考になるのではないかと考えています。「川内川あらし」を例にとり、これまでの経緯を紹介させていただくと共に、その問題点を皆様と共に考える機会となれば幸いです。

6. 「蜃気楼の見える街 魚津での蜃気楼観光と気象」

佐藤真樹（魚津埋没林博物館）

北陸の日本海に面した富山県の魚津市。この街では、春から夏にかけて県内外からの観光客が蜃気楼を見にやってくる。2018年は、蜃気楼の観測回数が過去最多の41回（10月31日現在）となり、その予報や実況が注目されている。

日本気象協会は蜃気楼出現予測を行い、埋没林博物館を含む各メディアに提供している。埋没林博物館では、蜃気楼の観測や調査を1992年から行い、蜃気楼の実況を把握している。さらに、蜃気楼を観測した日には、見られた方に蜃気楼証明書を発行している。

また、博物館に隣接する海の駅蜃気楼付近では、観光客に対し観光ガイド「しんきろう見させ隊」が蜃気楼の解説や、「見られんだちゃ（見られなかった）証」を出している。

過去5年間の蜃気楼予報と蜃気楼の実況は、対応がよい傾向がみられた。一方、蜃気楼証明書や見られんだちゃ証の発行数の減少や、博物館や海の駅への入込の減少という問題と気象について考察する。